

湯ったん(283)

LY

フロサで、家にもソカ
多くなり、ロ、エ、ヤが
ふんだ。

と云ふ事



★ ★
きんぎょの運勢

● 夕 ● 生

職人匹敵の大仕事も

協力し合い、前進実感

農業班の蒲池信行さん

京田辺市にある「さんさん山城」（新免修施設長、藤永実管理）は2011年の開所以来、聴覚障害者の就労支援をはじめ、知的障害がある若年利用者も年々増えている。地元の特産物を栽培・収穫する農業をはじめ、喫茶、縫製、販売などの部門でそれぞれが持ち味を発揮し、時に横断的に活動する利用者と職員の日々、現在に至る「人生賛歌」をシリーズで綴る。

ほとんどせず、その後へ。福岡・直方で高校まで過ごし、大阪へ仕事

る澤田信行さん（80）
「宇治市小倉町」際一
は、「健康で体が続く限り働いていたい」と、こ
こ10年携わるさんさん
の農作業。これまで培
った器用さを生かした道
具、設備作りに意欲を
燃やしている。



をじいに出て来た。

鉄工や木工所を経て、住宅建設会社に5年間勤務。ある日、響者が何度でも不合格になりながらも念願の運転免許を取得したという記事を目にし、当時の社長に「取りたい」と直訴。会社の車を練習に使わせてもらい、10回以上チャレンジを繰り返した筆記も乗り越した。現場の作業をこなし、図面を与えられモノを作る技術や感性を身に付けていった。2人車で資材を運搬し、遠距離運転もしよつちゅう。阪神淡路大震災の際、「ガタガタになった尼崎の道も通った。昭和から平成へ景気の雲行きも變りが見え、やがて別

朝5時から夜10時ま
り。農業をスタートさ
せて免状証を手に入れ
た。その後、さんさんと
の出会いが70代の掛か
り。農業をスタートさ
せて免状証を手に入れ
た。

「お茶を育てる高菜下の小さな畑のさばかりのさんさんは「道具も何もない。経験もなかった。みんなでレベルを上げていった」。

えていった。順風満帆でかす。

はなかつた工振り返る。
農大出身の藤永管理者が積極的に声掛けし、他所にも足を運んで発展のエキスを内部に還流。蒲池さんは以前はバラバラで作業が進まなかった。今は足並みを揃えてやる。効率的に協力し合うようになった」と経過を明かにしむ。

父も九州を後にして宇治市小倉町に居た構え、今は夫婦2人で暮らしている。「家も喧嘩している。妻も三気」とはにかむ。車もアルプラやイオンにいい物に出掛けると「自然と野菜に目が行く」と笑う。11月の車検切れを機に「運転はやめよう」と決めている。

利用者に安心、安全を

高性能
光触媒
コロナ感染予防施工

城陽市民体育館などを指定管理する公益財団法人城陽市民余暇活動センター「スポーツ事業部」は、新型コロナウイルス感染症から利用者を守るため、トレーニングルームや男女別の更衣室・トイレ・シャワールームの高性能な光触媒効果が期待できる吹き付け作業を行った。

利用者の安心、安全を守る取り組みの一

環。これまでトレーニング機器などは利用者が代わるたびに、職員がアルコール消毒をしていたというが、それでもコロナ禍の不安は完全に払拭できなかつた。

それを受け、スポーツ事業部は約100万円の費用をかけて、専門業者に効果的な「イオニアミストPRO」の吹き付けを依頼。休館日だった27日午前

に木ナカ隴で0.1用 他、の考づくし、齡か器は たら